



式典の視聴は教団ホームページの「大聖堂ライブ配信」から。パスワードは教会にお問い合わせください。

ねはんえ

涅槃会

令和4年
2月15日



神奈川支教区の青年女子部員16人による奉献の儀（平成25年2月15日／大聖堂）

涅槃会は、お釈迦さまが入滅した2月15日に行なわれる法会です。

お釈迦さまは、約2500年前に仏教を開き、生涯にわたり仏教の布教伝道に努めました。死期を悟った際、弟子の阿難あなんに「自灯明・法灯明じとうみょう ほうとうみょう（自分自身をよりどころとし、法をよりどころにする）」という教えを説かれ、80歳の生涯を閉じました。

涅槃会は、数多くの教えを説いたお釈迦さまに感謝するとともに、お釈迦さま（仏）・教え（法）・共に教えを信じ行じる仲間（僧）の三宝を心にきざむ日でもあります。

お釈迦さまは四十余年の布教の最後に、自らを抛り所とし、また自らは法を抛り所とするように説かれました。

法・教えを抛り所として生きるということは、感謝のできる人間になることです。いのちを頂いていることは有り難いことです。水や空気や太陽などあらゆるものに支えられているわけですから、それだけでも有り難いことです。有り難いものに囲まれている私たちが、本当に感謝のできる人間になるということが、お釈迦さまが教えを通して伝えたかったことです。（令和3年涅槃会での齋木教会長ご指導より）

立正佼成会

仏さまの近くにいる人

「私の衣に触れるほど近くにいても、欲望や怒りに振り回され、放逸ほういつにふける人は、私から遠く離れている人である」

と、お釈迦さまはおっしゃられています。そして、

「たとえ私から百里も離れた所にいたとしても、欲望や怒りを離れ、放逸に陥らない人は、私のいちばん近くにいます」

と教えられます。

いつもお師匠さんの近くにいますと、いつでも教えを聞けるようになつても、つい慣れっこになつてしまい、その言葉の一つ一つの大切さに気づけなくなることがあるのですね。反

対に、お師匠さんから遠く離れていて、滅多に教えを聞くことができないからこそ、その教えのひと言ひと言に真剣に耳を傾け、その教えを命がけで守ろう、と精進を怠らない人もいます。

「仏の山に鬼が住む」という言葉があります。慣れが、つい油断を生んでしまうのです。これが大敵です。

ご法の真理は、自分をなげうって教えを行じてこそ、そのはたらきが見えてきます。どこにしようとして、その法を見る人こそが仏さまのいちばん近くにいる人であり、仏さまのご守護に包まれる人なのです。『開祖随感10』より